「気になる子」に関する保育者の意識と支援の実態
―保育所アンケートからクラス構成に着目して―

落　合　利　佳
（教育学科教育学専攻）

公立保育所の３・４・５歳児および異年齢クラスを担当している保育士を対象に「気になる子」への意識と支援に関する実態調査を行った。各クラスに占める「気になる子」の割合は36.5～42.8％で，年長クラスで一番多かった。「気になる内容」は平均13項目（21項目中）で，多動や不注意など集団場面で支援を必要とする内容や年長児では就学後の学習に関与する手指の巧緻性に関連した項目で高い割合を示した。全ての「気になる子」に支援はされていなかったがその理由として，人的資源や時間的余裕の問題の他，支援の方法がわからない，支援のニーズの低さなどが挙げられた。

キーワード：気になる子，発達障害，実態調査

１．はじめに

発達障害には自閉スペクトラム症，注意欠如多動症などがあり，その特性として，社会性やコミュニケーションの問題，こだわり，不注意，多動，衝動性などがある。自閉スペクトラム症では小児期に主に孤立型，積極奇異型，受動型の３タイプがみられる。孤立型は，人への興味関心が薄く，呼ばれても来ない，話しかけても答えないなど，集団での仲間に無関心あるいは警戒するなどの様子が見られる。積極奇異型は要求や自分の思いなどを一方的に人に話しかける一方で，思い通りにならないと，扱いにくくなったり攻撃的になったりする様子がみられる。この２つのタイプとは違い，受動型は，自分から人とのかかわりを始めようとはしないが，人との接触を受け入れ，従順で，言われたことに従うので，他児は喜んで遊びにこのタイプの児を加える様子がみられる[1]。

発達障害の特性を有する子どもが保育所や幼稚園などの就学前集団で観察される様子として，集団に入らない，一斉指示が入りにくい，切り替えの苦手さ，新規場面への不安，じっとしていられない，姿勢が崩れる，暴力，暴言などがある。このような言動がみられる子どもは「気になる子」として保育者に気付かれることになる。

保育現場での「気になる子」に関する先行研究[2),3),4)]において，その定義は定まっておらず，研究者によって定義や解釈など表現の仕方は様々である。しかし，多くの場合，発達面での遅れやアンバランスなどの課題があり，保育を行う上で支援や配慮が必要な子どもととらえており，当然その中に発達障害が疑われる子どもも含まれる。実際に筆者が巡回相談で保育士から相談に挙がる子どもは，すでに専門機関に通院している障害児の他に未受診であるが行動観察や聞き取りから発達障害が疑われる児童が多い。

これまでの先行研究において，気になる子の内容としては向社会性，多動，不注意，行為面での困難さに関連する表現が多くみられる[5),6)]。また，このような困難さがみられる子どもは，集団場面での適応困難が見られることが多く[6)]，支援の必要性も増すため，保育者に気づかれや

すい。

しかし，実際には，支援を必要としているのはこのような目立つ言動が見られる子どもだけではない。先述の受動型の自閉スペクトラム症の子どもは目立ちにくく，一見集団に適応しているように見える場合もある。筆者の発達外来に相談に来られたお子さんについて次のようなエピソードがある。

その子は園で「いや」が言えずおもちゃを友達に譲り，したくない遊びも我慢をしつづけていた。また，周囲から見ると，根気よく頑張って取り組んでいるようにみえた制作場面でも，「手伝って」が言えず一人でできなくて困っていた。「優しくて，お友達から好かれている。お友達がみんな一緒に遊びたがる。園では何も問題がない。」と担任は驚いていた。

このような援助要請や，拒否などの意思表示の弱い子どもに対する保育者の気づきや支援の実態に関する調査研究はまだ十分になされていない。そこで，今回は，保育士がどのような子どもの様子を「気になる子」ととらえ，支援を行っているのかに関して調査を行ったので考察を加えて報告する。

2．方法

目的　保育現場で「気になる子」の「気になる内容」への意識と支援の実態をあきらかにする。

調査期間　2019年８月～2020年２月

調査対象　Ａ市公立保育所14施設で異年齢クラスを含む３・４・５歳児クラス担任をしている保育士

調査方法　保育所巡回相談時に直接依頼もしくは，Ａ市子育て支援課から所長会を通じて調査用紙の配布・回収を行った。

倫理的な配慮　本研究の趣旨について直接依頼時には口頭で，その他は文書にて説明を行った。また，結果について，個人が特定される形で公表することはないこと，いつでも研究協力を撤回できることについて同様に説明した。

尚，Ａ市公立保育所の特徴として入所児の約３割が，障害児あるいは気になる子であり，一部の施設では３・４・５歳児の異年齢保育を行っている。

調査内容　基本情報として，年齢，経験年数，受け持ちのクラスの年齢，人数を尋ねた。また，「気になる子」の実態調査は，受け持ちのクラスでの「気になる子」の有無，内容，支援状況について質問紙形式で行った。「気になる子」として具体的に粗大運動，微細運動，不注意，多動，衝動性，社会性など，発達面，情緒面で課題がある場合に観察される内容を中心に21項目を準備した。

得られたデータは回帰分析または Mann-Whitney 分析を行った。

3．結果

⑴　有効回答率

回答は全14施設の各のクラスの担任から得られた58回答のうち，記載に不備のあるものを除いた，46回答（79.8％）を有効とし，分析を行った。

⑵　回答者の内訳（表１，表２）

回答者の受け持ちのクラス，年齢構成，経験年数を表１に示す。回答者は30代に次いで20代が多く，経験年数は，３歳児と異年齢クラスの担当が少ない傾向にあった。また，担当クラスの児童数は平均約19～22人（表２），担任は１～３人であった。

⑶「気になる子」の有無と「気になる内容」（表３－５，図１・２）

担当クラスで気になる子の割合は，年長児クラスで一番高く42.8％，全体平均で39.1％で

表１　担当クラス別の経験年数と年齢構成

	経験年数（年）	20代※	30代※	40代※	50代以上※	計※
３歳児	8.5±5.8	4	7	1	0	12
４歳児	13.2±9.3	4	4	2	1	11
５歳児	11.3±7.3	6	6	3	0	15
異年齢	8.8±4.7	3	4	1	0	8
全体	10.6±7.6	17	21	7	1	46

（※数値は人数）

表２　担当クラスの児童数

クラス	平均± SD
３歳児	19.6±3.7（13－23）
４歳児	21.0±1.7（18－24）
５歳児	22.5±4.9（13－30）
異年齢	19.4±4.1（14－26）

（数値は人数）

表３　担当クラスでの「気になる子」の割合

クラス	「気になる子」の割合
３歳児	36.5（13.0－82.4）
４歳児	38.1（10.3－63.6）
５歳児	42.8（24.0－76.9）
異年齢	37.3（17.4－75.0）
全体	39.1（10.3－82.4）

（数値は％）

あった。しかし，回答者によってその割合は10.3～82.4％と個人差がみられた（表３）。経験年数と気になる子の割合には有意な関係を認めなかった。（図１）

気になる子の存在に関しては，全員が現在担当クラスに「気になる子がいる」と回答した。また，「気になる内容」は保育士１人当たり21項目中平均11～13項目であり，最大20項目，最小６項目とこれも回答者により個人差を認めた。（表４）経験年齢と項目数に有意な相関を認められなかった。

表５と図２に示すように，保育士が気になる子の「気になる内容」として各クラスで８割以上の担任が選択した項目数は，３歳で３項目，その他のクラスでは６～８項目と３歳児で少ない傾向にあった。

項目別にみると，「落ち着きのなさ」（90.9～100％），「全体指示が聞けない」（80.0～100％），「周囲の刺激に目を奪われて人の話を聞けない」（75.0～87.5％）と多動と不注意に関する内容が全体的に高い割合を示した。また，クラスの特徴として「集中できない・注意がそれる」（72.7～93.3％）は３・４歳児が７割台であったのに対し，５歳児（93.3％），異年齢（87.5％）で高い割合を示した。また，「体の使い方」は３歳児（91.7％），４歳児（90.9％），「姿勢」は４歳児（90.9％），５歳児（86.7％）で，協応運動や微細運動に関連する「手先の不器用さ」については，他のクラスが62.5～75.0％だったのに対し，５歳児で93.3％と高い割合を示した。自己制御に関連する「思い通りにならないと我慢できない」は，異年齢（87.5％）と５歳児（86.7％）で高く，年齢が低くなるほど

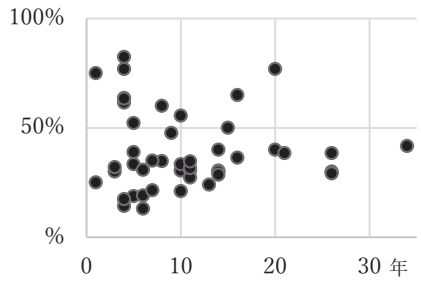

図１　経験年数とクラス内の気になる子の割合

低い割合を示した。コミュニケーションに関連した３項目のうち「困っているときになかなか言葉で援助を求めない」は，４歳児（90.9％），「嫌な時の意思表示が言葉で上手にできない」は，異年齢が87.5％で高く，「欲しいときの意思表示が言葉で上手にできない」は一番高かった４歳児でも54.5％であった。その他にも４歳児では，「自分中心の行動」・「発音」で81.8％と高い割合を示した一方で，「場所や物への執着・こだわり」は27.2％と低かった。

社会性に関連する３項目のうち，「同世代の子どもたちの中に入らない」（8.3～25.0％），「友達と一緒に同じ遊びをしない」（25.0～45.5％）はいずれも３歳児が一番低かった。また，「年齢不相応の振る舞いや友達関係」は４歳児で18.2％，３歳児で33.3％であった。

⑷「気になる子」の有無と「気になる内容」への支援の実態（図３－６）

気になる子に対する支援の実態は図３に示すように約３～５割がクラスの「気になる子」全員に支援を行っている回答していた。「全員に

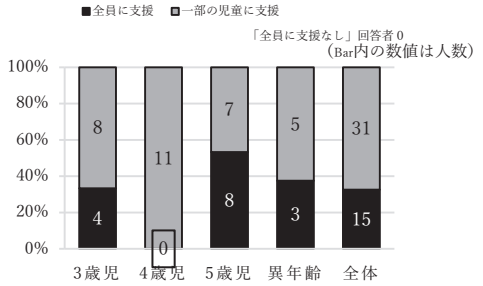

図３　気になる子への支援の実態

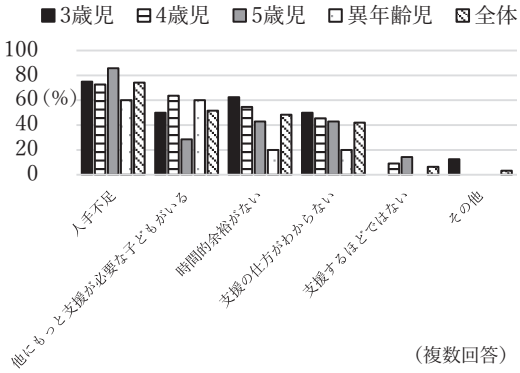

図４　全員に支援を行っていない理由

支援を行っている」と「一部の児童に支援を行っている」の回答者の経験年数に有意差は認めなかった。

「気になる子」全員に支援が行われない理由（図４）として「人手不足」（約60～85％）が一番多く，その他では異年齢クラスを除いたクラスで，それぞれ約40～50％が「支援の方法がわからない」，約40～60％が「時間的余裕がない」を理由に挙げていた。また，４歳児と異年齢クラス担任の約６割は「ほかにもっと支援が必要な子どもがいる」と回答していた。「支援の方法がわからない」あるいは「支援するほどではない」を回答した16名のうち５名が両方を回答していた。

「支援の仕方がわからない」を選択した回答者は30％（14名）で，一人あたり平均3.8項目，多い回答者で11項目を支援の仕方がわからない子どもの「気になる内容」として挙げていた。

対象児の気になっているが「支援の仕方がわからない」項目として高かったのは，「困っているときになかなか言葉で援助を求めない」（60％，10人中６人），「周囲の刺激などに目を奪われて人の話を聞けない」（50.0％，10人中５人），「マイペース」（44.4％，９人中４人），「思い通りにならないと我慢できない」（41.7％，12人中５人），「全体指示が聞けない」（35.7％，14人中５人）であった。（図５）

同様に，「ほかにもっと支援が必要な子どもがいる」「支援するほどではない」と回答した16名（35％）に対し，「支援が優先されない」あるいは，「支援するほどではない」とする子どもの「気になっている内容」を尋ねた質問では，21項目中平均5.8項目（最大14項目）挙げていた。具体的な項目として，「マイペース」（75％，12人中９人），「手先の不器用さ」（70％，10人中７人），「姿勢」（53.8％，13人中７人），「思い通りにならないと我慢できない」・「困っているときになかなか言葉で援助を求めない」（45.5％，11人中５人），「周囲の刺激などに目を奪われて人の話を聞けない」（42.9％，14人中６人），「落ち着きのなさ」（40％，15人中６人），であった。また，「嫌な時の意思表示が言葉で上手にできない」は41.7％（12人中５人），「欲しいときの意思表示が言葉で上手にできない」は30％（10人中３人）であった。（図６）

表４　「気になる内容」の項目数（全21項目）

クラス	項目数
３歳児	11.9±3.2（7－19）
４歳児	13.5±3.8（7－20）
５歳児	13.3±3.8（6－18）
異年齢	13.6±4.1（9－19）
全体	13.1±3.8（6－20）

４．考察

⑴「気になる子」の割合

今回の調査では，調査対象者の勤務先が公立保育所であることもあり，全員が担当クラスに「気になる子」が存在すると回答した。この結果は，他の報告[5]と同様に高い水準を示した。

表５　クラス別の「気になる内容」

気になる内容	３歳児	４歳児	５歳児	異年齢	全体
１．落ち着きのなさ	91.7	90.9	100.0	100.0	95.7
２．全体指示が聞けない	83.3	100.0	80.0	100.0	89.1
３．集中できない・注意がそれる	75.0	72.7	93.3	87.5	82.6
４．周囲の刺激などに目を奪われて人の話を聞けない	75.0	81.8	86.7	87.5	82.6
５．体の使い方	91.7	90.9	73.3	62.5	80.4
６．姿勢	66.7	90.9	86.7	75.0	80.4
７．手先の不器用さ	75.0	72.7	93.3	62.5	78.3
８．思い通りにならないと我慢できない	58.3	72.7	86.7	87.5	76.1
９．自分中心の行動	58.3	81.8	66.7	75.0	69.6
10．嫌な時の意思表示が言葉で上手にできない	66.7	63.6	66.7	87.5	69.6
11．困っているときになかなか言葉で援助を求めない	66.7	90.9	60.0	62.5	69.6
12．発音	58.3	81.8	73.3	62.5	69.6
13．マイペース	58.3	72.7	66.7	62.5	65.2
14．初めての場面・状況に慣れるのに時間がかかる	66.7	54.5	60.0	50.0	58.7
15．他の子への暴力	50.0	72.7	33.3	87.5	56.5
16．場所や物への執着・こだわり	41.7	27.3	53.3	50.0	43.5
17．欲しいときの意思表示が言葉で上手にできない	41.7	54.5	40.0	37.5	43.5
19．友達と一緒に同じ遊びをしない	25.0	45.5	33.3	37.5	34.8
20．同世代の子どもたちの中に入らない	8.3	18.2	26.7	25.0	19.6
その他	0.0	0.0	6.7	12.5	4.3

は＞80％　は＜40％
（数値は％）

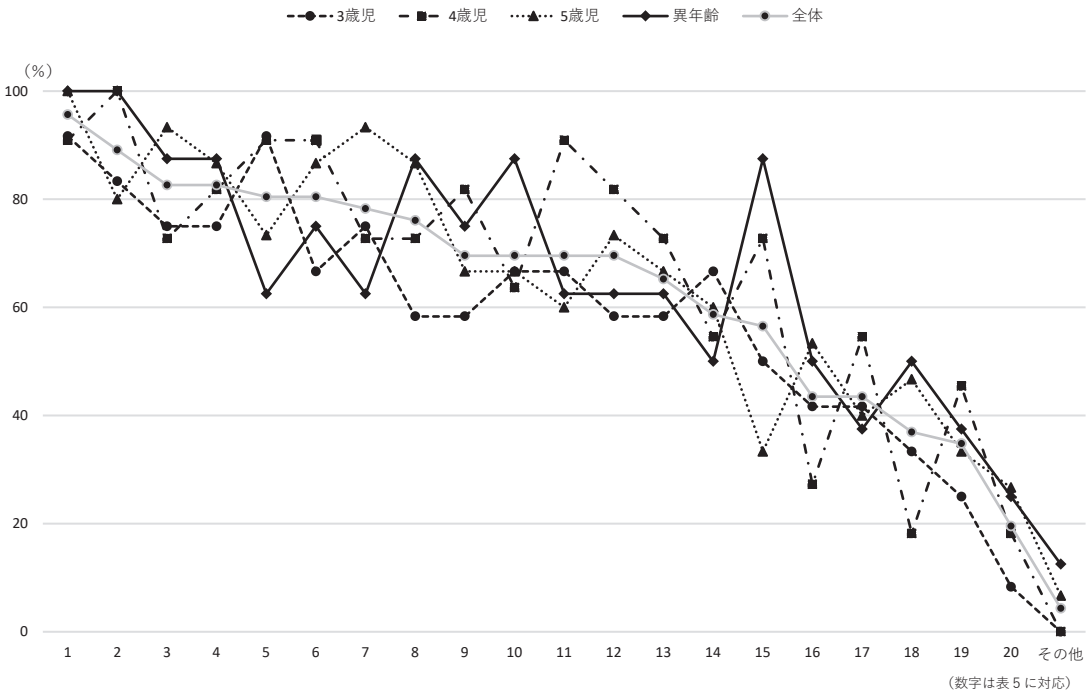

図２　クラス別の「気になる内容」

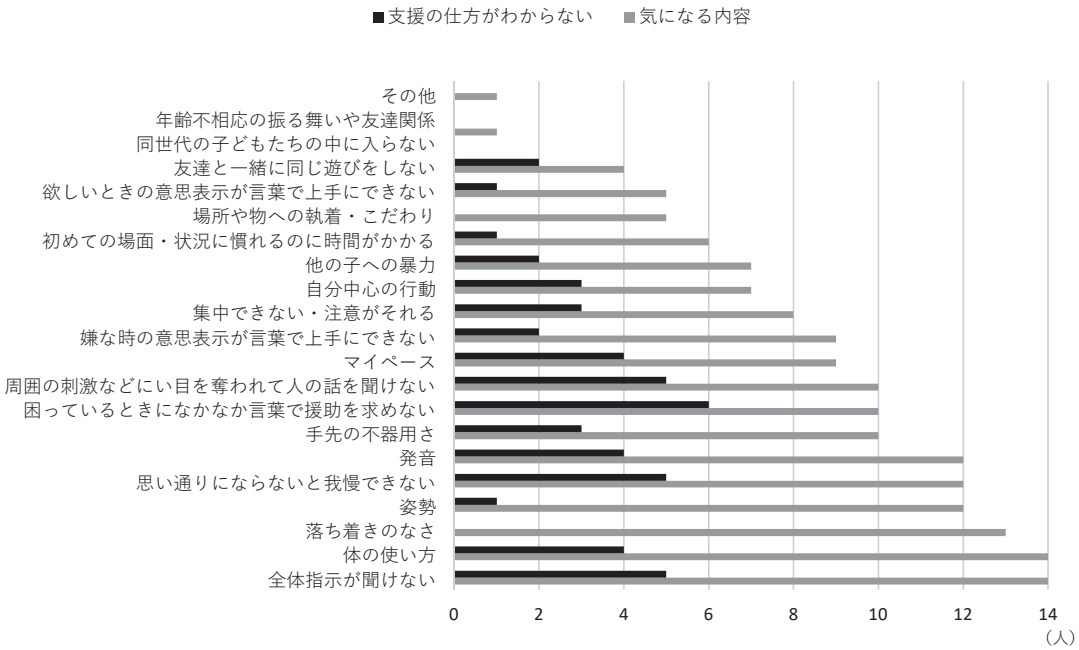

図５　支援の仕方がわからないと回答した保育士の「気になる内容」と「支援の仕方がわからない内容」（複数選択）

これまでの「気になる子」に関する報告[6),7),8)]によると調査方法や地域，集団，「気になる子」の定義の違いなどから，一概に他の報告と比較はできないが[6)]，その割合は5.4～53.6％と様々である。今回の気になる子の割合が36.5～42.8％であり５歳児で一番高いという結果は，京林の報告[6)]（32.8～53.6％）と同様の傾向を示した。その理由として，調査対象者の勤務先がより障害児が支援を受けやすい環境にある公立保育所であり，保護者の口コミや保健師のアドバイスなどで，要支援児童が集まりやすい状況も理由として考えられる。また，保育士研修や巡回相談などを通して，発達障害をはじめ障害児の見立てや支援をはじめ知識などの普及に伴い，保育士が気づきやすくなっていることも挙げられる。ただ，気になる子の割合が，経験年数に関係なく個人差が大きかった結果から，実際の集団の特徴，子どもの言動に対する保育士の気づきに対する個人差などがあると考えられた。

⑵　年齢（クラス）による「気になる内容」の特徴

気になる内容に用いた21項目の選択肢は，発達面で課題がある場合に観察される内容であり，本来であれば，すべての項目に対し保育士が一人一人の子どもに気にしなければならない内容である。今回の結果からは，これらの項目の９割以上を「気になる内容」として挙げている保育士がいた一方で３割程であった保育士もいた。クラスや地域性もあるので一概には言い切れないが，少なくとも「気になる内容」に対する感度に個人差がある可能性は否定できない。また，データ数は多くなかったものの，経験年齢と項目数に有意な相関を認められなかったことから，経験年数の問題ではないこともわかる。この結果から，保育の質向上のためには，まずはこの保育士間の意識の差を縮めることを考える必要があると思われる。

すべてのクラスで高い割合を示した「気になる内容」は，これまで報告[5),9),10)]されているのと同様に，「落ち着きのなさ」，「全体指示が聞けない」であった。この２つの項目は，集団で一

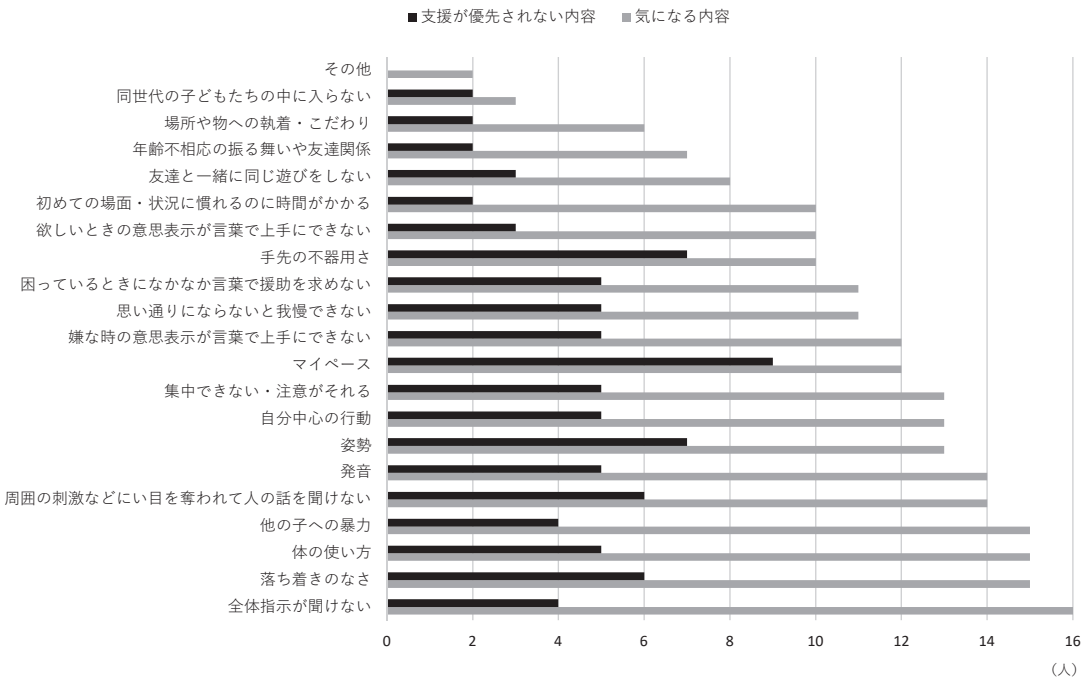

図６　支援が優先されない，あるいは，支援するほどではないと回答した保育士の「気になる内容」と「支援が優先されない内容」（複数選択）

斉行動を行う場面で目立ち，特に個別の声掛けや支援を必要とする内容である。したがって，どのクラスにおいてもほとんどの保育士が「気になる内容」として選択し，その結果高い割合を示したのは納得できる。

また，３歳児では，これらの項目と「体の使い方」以外の項目は，他のクラスと比べて割合が低かったが，３歳児は発達面からとらえると，意図理解の弱さがあり，自己抑制も未発達であるので[11]当然のことと考えられる。すなわち，たとえば，子どもの様子として，我慢の閾値の低さ，対人トラブル，長く続かない集中力，暴力や衝動的な言動などが多少目立って観察されたとしても，それはこの年齢の定型発達の子どもにもみられることとして，気づいていてもこの時期ではまだ「気にならない」のではないかと考えられた。

５歳児の集団では，共同的な活動が様々な場面で繰り広げられ，そこでは，話し合って問題を解決する，規律を守って行動するといった，社会性，自己統制能力，言語能力などが必要となる[12]。今回の調査では有意差を認めなかったが，５歳児が他の年齢よりも気になる子の割合が高い報告[6]もある。定型発達児は，年齢とともに自己抑制，自己主張もバランスよく発揮できるようになっていくことから，４歳児，５歳児のクラスで，「集中できない・注意がそれる」，「周囲の刺激などに目を奪われて人の話を聞けない」，「思い通りにならないと我慢できない」様子が見られる子どもは，保育する側にとってより目立つようになるため，高い割合になったのではないかと考えられた。

姿勢・運動面に関して，３歳児，４歳児では「体の使い方」が気になる保育士が多かったが，子どもの運動発達の時期と関連していると考えられる。というのも，３歳児は，歩く，走るといった体の移動や，立つ，座るといった体のバランスをとる基本的な動きが一通り完成し，さらによりスキルアップする時期である[13]。また，４歳児は，これらの基本的な動きが定着し，集団で一緒に体を動かすことを楽しみ，さらに多くの動きを経験する時期でもある。この年齢で

は特に全身のバランスをとる能力が発達し，遊具などを上手に操作するようになっていく[13]。したがって，そこに課題が見られる場合，大型遊具などを使った遊び，リトミックやサーキット運動，階段を使った移動時に，目立ち気づかれやすくなる。4歳児・5歳児で高い割合を示していた「姿勢」に関しても同様のことが言える。朝の会など座って話を聞く時間や，パズル遊びや制作といった机上活動が増え，より長い時間「じっと座る」機会が増えていく。定型発達児がある程度の時間，姿勢を保持して座ることができるようになっていく中，低緊張などで姿勢保持に課題がある子どもは目につきやすくなる。

また，5歳児クラスでは，「手先の不器用さ」が高い割合を示したが，5歳児の制作活動や玩具の遊び方の中には手先の巧緻性が求められる内容も少なくない。また，この項目は就学後の書字の他，図工や音楽などといった道具を扱う学習に関連した項目でもある。保育者が就学を意識した場合，学習や学校生活に関連したスキルや言動に関する「気づき」の感度が上がることは予想されるため，この結果は当然ともいえる。同様のことが集中力や指示理解，自己抑制などに関連した項目で高い割合を示していることにもいえる。一方で「他の子への暴力」が5歳児で一番低かったが，それまで乱暴だった子どもが自己抑制できるようになり落ち着いてきた可能性と同時に，周囲の子どもが，状況把握や因果関係を理解できるようになり，乱暴な子に対して事前に危険を察知し回避できるようになっているとも考えられる。

特に，4歳児に関しては，他のクラスと比べて回答者の8割以上が「気になる内容」としてあげた項目数も割合も高い傾向にある。この年齢は定型発達児の自己抑制，協調性，社会性，様々な運動スキルを獲得していく時期にあたる[12),13),14)]。従って，マイペース，援助要請，発音などを含む，それまで気づいていなかった，あるいは気づいているが気になっていなかった子どもの言動に関して，保育士が「急に気になりだす」，あるいは「疑いが確信になる」年齢が4歳児ではないかと考えらえた。

異年齢クラスの特徴は，同年齢だけでなく異年齢の子ども同士の関わりがあることである。同年齢でかみ合わない子どもが，他の年齢の子どもとはうまく関わりが持て，居場所をみつけることができるなど，多様な人間関係の経験の中で育ちあうことができる[15),16)]。また，障害児に関しても，発達の促しと危険回避なども指摘されている[17)]。反面，5歳児に「年下の世話をする」役，3歳児に「年上から世話をされる」役を担わせることで，5歳児と3歳児がそれぞれ行動を「強制する」，「強制される」立場になる。そこで，3歳児は指示をだす5歳児に反発心を持ち，5歳児は従わない3歳児に対して怒りや苛立ちを覚えることになり，ここで人間関係の摩擦が生じることになる[15),18),19)]。

本調査の異年齢では，不注意，多動に加えて，「他の子への暴力」，「思い通りにならないと我慢できない」，「嫌な時の意思表示が言葉で上手にできない」といった自己抑制に関連する項目が高かったが，上述の内容を踏まえて，「自分より年下の子どもへのいたわりや思いやりの気持ちを感じたり，年上の子どもに対して活動のモデルとしてあこがれを持ったりするなど，子どもたちが互いに育ちあうこと」（保育所保育指針解説2008）[20)]ができているのか振り返る必要もあると思われる。

保育士が「気になる内容」として低い値を示した「年齢不相応の振る舞いや友達関係」，「友達と一緒に同じ遊びをしない」，「同世代の子どもたちの中に入らない」の3項目は，保育現場では自由遊びの場面で確認されやすい内容である。これは，社会性に関係する項目であり，知的な遅れがある子どもや社会性に課題がある子どもにみられやすい。また，これらの特性を持つ子どもの場合，本来であれば，こだわり，新規場面の不安，マイペースさ，自分中心の行動なども関連してくることが多い。しかし，これらに関連した項目と上記3項目の数値には乖離がある。確かに，子どもの集団での遊びの姿として4歳以降は，一人遊び，遊びに専念していない行動が減り，平行遊び，連合遊び，共同遊

びが増えるので[21]，本来であれば，子ども同士で遊ばない，などの様子が見られれば「気づき」がでてきてもよいはずである。自由場面では，遊びや興味が合う子ども同士で一緒に過ごすことが多い。そこに，同じような特性や認知レベルの子どもがいると一緒に遊ぶことが多い。実際に，筆者が巡回相談時でも，「遊びがみつからずふらふらしている」，「遊びを広げるのはどうしたらよいか」といった形での相談が多く，「ずっと一人で集団に入らないで遊んでいる」ことへの相談は少ない。「定型発達の子どもとは一緒に遊ばないが，同レベルの気の合う子どもと一緒に過ごす」といった内容もよく聞かれる。また，連合遊び，共同遊びと比べ頻度は少ないが，ひとり遊びも幼児期を通して存在する[11),21)]。したがって，「（同じ発達レベル・特性を持つあるいは興味の偏りのある）友達と一緒に同じような遊びをしている」，「（同じ発達レベル・特性を持つあるいは興味の偏りのある）同世代の子どもと一緒にいる」として認識している可能性も含め，これら内容が気にならずに結果として低い値になったのではないかと考えられた。社会性に関する項目に関しては，子どものどのような様子を気にしなければいけないのかをもう少し丁寧に保育者に伝えていく必要があると思われた。

⑶　支援の実態と課題

気になる子に対する支援の状況については，４歳児を除いて，回答が分かれたが，「気になる子」のうち支援が必要である子どもは７割であるという報告[6)]があり，必ずしも「全員に支援を行っていない」ことが「支援を要する子どもに支援がされていない」を意味するものではない。感度をあげて「気になる子」を積極的に拾い上げれば，むしろ支援の必要性が低い子どもがでてくるはずである。また，保育士にとって「気になる子」ではないが，実際には困難を抱えていてい支援を必要とする子どもが約２割存在する報告もあることからも，「全員に支援を行っている」という回答をそのまま解釈してよいのかという疑問がある。支援の必要度は高くないが手厚い支援を受けている子どもがいるというとらえ方もできるが，気づかれていない支援の必要な子どもの存在を否定することができない。

「気になる子」の行動に影響を与える要素として，発達障害，養育環境の問題，園環境の３つが挙げられる[22)]。園環境とは，担任などの大人，集団，部屋，動線などの物理的環境が関係している。以前，民間・私立を含む幼稚園と保育所で行った調査[10)]で，「気になる子」全員に支援を行っていない理由として，一番多かったのが人的資源不足であったが，人的資源の確保が経営的にも厳しい民間施設と比べ公的施設のほうが手厚い。公立保育所を対象とした今回の調査では，要支援児に対し支援度に合わせて加配が配属されている環境下でも，「気になる子」の「一部に支援を行っている」理由として，人的資源不足が一番多かった。これに対して，人的資源の補充を考える前に，まずは，配置された加配をもっと有効に活用する方法について今後検討を行っていく必要があるのではないかと考える。また，時間的余裕のなさについても，動線の工夫や，手順の省略など保育環境の整備[23)]を行うことでもう少し改善できる余地があるはずである。

筆者はＡ市で巡回相談を通じて，ケース毎に子どもの見立て，集団のなかでの支援の在り方などを担当保育士に指導している。しかし，そこで相談に挙がる児童数は限られており，実際の集団の観察から，相談件数よりも多くの「気になる子」がクラスに存在していることを実感している。Ａ市幼保総合支援室では，毎年巡回相談に挙がったケースに関する事例集の作成や，様々なテーマでの研修，保育環境に関する独自の資料作成をするなど保育の質の向上に取り組んでいる。今回支援の方法がわからないという回答が保育士の30％にみられたが，半数の保育士が「気になる子」への対応に困っており，40％の保育士が「対応方法がわからない」とした菅原の報告[5)]と比べると割合としては低いといえる。しかし，これまで様々な取り組みがされてきた上での今回の結果から，実際の集団の

中で子ども一人一人の困難さに気づき支援を行う難しさを実感させられる。「支援の仕方がわからない」内容には，「マイペースさ」や「困っているときになかなか言葉で援助を求めない」といった子どもからの働きかけが少なく保育者が意識して積極的に働きかける必要のある項目や，「発音」，「体の使い方」や「手先の不器用さ」といった，言語療法，作業療法の専門的な知識やスキルを要する内容もあった。また，これらの項目のほとんどは支援が優先されない，あるいは，支援するほどではない「気になる内容」にも一定の割合を占めていることから，今後の研修などを行う際にこれらのテーマを取り入れていくことも質の向上につながるのではないかと思われる。

また，子どもの状態や集団の姿もその時々の状況によって変化し，支援の方法もそれに合わせていく必要がある。保育の「気づく」感度を高めるだけでなく，保育者の支援に関するスキル向上に向けてこれまでの取り組みにさらなる工夫が必要である。保育のスキルや気づきの差を縮めるための取り組みとして，例えば，個人情報の保護に配慮した上で，ちょっとした保育のコツや工夫，子どもの気になる様子などについて動画を含めたコテンツの作成なども有効ではないかと考える。

5．まとめ

保育所で「気になる子」への保育士の意識や支援は，クラス構成で特徴があり経験や年齢に関係なかった。すべての子どもに質の良い保育を提供するために，加配を含め保育士の効果的な研修などが求められる。

文献

1）自閉症スペクトル：親と専門家のためのガイドブック　ローナ・ウィング　東京書籍，1998
2）幼児教育のデザイン―保育の生態学―　無藤隆，東京大学出版会，2013
3）保育所・幼稚園の巡回相談における「気になる子どものチェックリスト」の開発と適用　日高希美　橋本創一　秋山千枝子，東京学芸大学紀要　総合教育科学系　59，503－512，2008
4）保育で気になる子どもたち　なかまづくりの保育をめざして　藤井貴子，かもがわ出版，2012
5）Ａ市内保育所における「気になる子」に関するアンケート調査結果より見えてきたもの，菅原亜紀，純真紀要　56，85－96，2016
6）「気になる子」の行動特性に関する保育者の認識：SDQ を用いた検討．京林由，岡山県立大学保健福祉学部紀要　26，97－103，2019
7）保育所・園における「気になる・困っている行動」を示す子どもに関する調査研究：障害群からみた該当児の実態と保育者の対応および受けている支援から，平澤紀子，藤原義博，山根正夫，発達障害研究　26（４），256－267，2005
8）就学前における「気になる子ども」の行動特性に関する検討，玉井ふみ，堀江真由美，寺脇希，村松文美，人間と科学　県立広島大学保健福祉学部誌　11（１），103－112，2011
9）特別な支援を必要とする子どもの理解と対応に関する研究：保育所に在籍する子どもの行動に着目して　小柳津，和博桜花学園大学保育学部研究紀要（18），13－23，2018
10）「気になる子」への保育者の支援の実態と意識　落合利佳，小田浩伸，石川慶和，本吉大介　大阪大谷大学教育学部幼児教育実践研究センター紀要　（４），18－30，2014
11）ベーシック発達心理学　開一夫／齋藤慈子（編）東京大学出版会　2018
12）幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を育む保育実践32　増田修治，黎明書房　2019
13）文部科学省　幼児期運動指針
14）遊びにつなぐ！　場面から読み取る子どもの発達　中央法規出版　2018
15）異年齢保育における幼児期の人間関係と指導・援助のあり方―九州保育団体合同研究集会の異年齢保育の実践報告から　坪井敏純，鹿児島女子短期大学紀要　54，61－67，2018
16）乳幼児期の保育の在り方について―異年齢保育の視点から―２異年齢保育実践の動向と到達点，３保育を「暮らし」という視点から問い直す，宮里六郎，保育通信724，全国私立保育連盟2015
17）札幌市及び周辺地域における異年齢保育の実態調査報告書，吉田行男，北海道大学大学院教育学研究科乳幼児発達論研究グループ　2009
18）憧れの年長さんになってほしい～異年齢児の中の５歳児～，永富千夏，第44回九州保育団体合同研究集会提案集，82－83　2014
19）それぞれの良さを認め合う仲間作りとは，伊藤沙央里，第40回九州保育団体合同研究集会提案集，66－67，2009

20）保育所保育指針解説，2008
21）social participation among pre-school children, Parten M. B. J abnormal and social psychology 27（3）243－269, 1932
22）気になる子がいるクラスを多面的に捉える―どの子にも居場所があるクラスを目指して，守巧，発達　特集“気になる子”の発達と保育　38（149），29－34，2017　ミネルヴァ書房
23）広さを考慮した保育環境の構造化と個別配慮の実際―京都市営保育所での取り組み―，落合利佳，京都女子大学発達教育学部紀要（16），1－10，2020

謝辞／付記

調査に協力いただいたＡ市公立保育所の保育士の皆様とＡ市幼保総合支援室の方に謝意を表します。

本研究は科研費（19K02632）の助成を受けたものである。